目次

はしがき……3
第一章　記紀の女性たち……8
(一)　日本の神話……8
(二)　神話の女性……15
(1)　イザナミとトヨタマ……15
(2)　アマテラスとスセリ……30
(3)　オキナガタラシヒメ……47
(三)　説話の女性……58
(1)　磐媛大后……58
(2)　女鳥王……70
(3)　影媛と衣通……77
(4)　雄略をめぐる女性たち……97
第二章　万葉の女性たち……106

(一) 伝誦歌の女性……106
(二) 宝皇女（皇極・斉明天皇）……118
(三) 額田王……129
(四) 鸕野讃良皇女（持統天皇）……140
(五) 大伯皇女……151
(六) 但馬皇女……158
(七) 遊行女婦の歌……168
(八) 大伴坂上郎女……183
(九) 狭野弟上娘子……206
(十) 家持をめぐる女性……221
(1) 大伴坂上大嬢……221
(2) 笠女郎と紀女郎……232

第一章　記紀の女性たち

(一)　日本の神話

最近の比較神話学によれば、日本神話は、吹き溜り神話ともいうべき形成の特質を示すと言われている。(注、「日本神話の源流」吉田敦彦氏講談社現代新書)

アジアの照葉樹林文化は広大なひろがりをもつが、その農耕文化の中心をなす大陸沿いに、弓なりにつづく日本列島は、北方では北ユーラシアの大陸森林地帯と接続し、西方では朝鮮半島を経て中国東北地方、蒙古等に結びつき、南端からは、点在する無数の島々を介して、台湾・フィリピン、さらには南洋諸島につながっている。こうした日本列島の地理的特性のために、古代諸方から日本に流入した文化は、ここで行きどまり、幾世代を経て混然とした吹き溜り文化を作りあげたようで、日本の先史文化は、最近の古代文化学ともいうべき学際的な研究の発達によって、その多元的な特色をよりはっきりさせつつある。

日本の神話も、その一端として、まことに多元的な要素を持っていることが、ここ三十

年来の比較神話学の研究によって、次第にはっきりしてきている。

たとえば、古事記神話は、先ずイザナキ・イザナミの天地創造(国生み)神話から始まるが、それはこの二柱の神が、天の浮橋(神話学的には虹の象徴とされている)に立って天の沼矛でもって下界の海洋をかきまぜ、その滴が自然と凝り固まって、オノコロ島という最初の陸地が生誕することから語りはじめられる。[1] つまり高天が原から降りてきた神が、海洋をかきまぜて最初の陸地を作ったという話だが、これはポリネシア(北はハワイから南はニュージーランドの島々に至る一帯)を中心とした南洋の島釣り型神話(原初に神が海底から島を釣りあげたという形式)や、蒙古の、昔天から降りてきたラマ僧が大洋を一本の鉄棒でかきまぜ、山型の陸地を作ったという説話と酷似している。

さらに古事記によれば、こうして作られた陸地の上に、イザナキ・イザナミが降り立って、天の御柱を立て、大きな宮殿を造り、二人がその柱を廻って「ミトノマグハヒ」(結婚)をし、国土を構成する島々を生み出していく筋立てになっている。[2] しかし、その最初の国生みは、男女神の発言の仕方が悪かったので、奇形の「ヒルコ」(水棲環形動物)や「淡島」といったちゃんとした陸地ではないものが生まれて失敗する。そこで二神は高天が原に上って、天つ神に呪占の指示を仰ぎ、その占い通りに再度夫婦の契りを結びなおし、その結